

青函の経営者交流 ビジネス革新探る

青森で津軽海峡圏シンポ



青函経済交流の取り組みを紹介する本県と道南の経営者ら

来年3月の北海道新幹線開業を機に、本県と北海道南地域の経営者交流やビジネス革新の可能性を探ろうと、青森地域社会研究所と明治大学ビジネス・イノベーション研究所は8日、青森市のねぶたの家ワ・ラッセで「津軽海峡交流圏シンポジウム」を開いた。

同シンポには県内の経済関係者など約150人が参加。同海峡をまたいでビジネスを展開している丸石沼田商店（青森市）の沼田廣社長、はとや製菓（同）の安保照子社長、五島軒（函館市）の若山直社長、服部醸造（八雲町）の服部由美子専務の4人が今後の展望などを語った。

函館市生まれの沼田社長は「新幹線開業で青森、函館が互いに『相手に客を取られる』という疑心暗鬼があるよつだが、互いにないものもある。青函は競争者であると同時に、協力者であるという関係を構築していくべきだ」と提言した。

本県業者と連携し、県産の乾燥ニンニクを使った「にんにく醤油」を製造している服部専務は、「青森には、まだまだいいものがある。山菜のミズは北海道ではほとんどないが、シャキシャキしておいしい。みそ漬げにできないか」などと、本県との共同商品開発に意欲を見せた。

青森市出身で明治大教授の佐々木聡・同研究所所長はシンポジウムを総括し、「青函地域の価値を高めるには、長期的な視点で見れば人材が大事。青森、函館が生んだ多くの偉人の業績を学びながら、未来につなげていくことが重要だ」と述べた。

（三好陽介）

青函交流拡大へ 津軽海峡シンポ

青森銀系シンクタンク

北海道新幹線



青森銀行系シンクタンクの青森地域社会研究所は8日、来年3月の北海道新幹線開業に向けて道南と青森県のビジネス交流を拡大しようと、青森市で「津軽海峡交流圏シンポジウム」を開いた。

両地域の企業経営者4人がビジネススマンら約150人を前に講演。飲食業の五島軒（北海道函館市）の若山直社長は「函館唯一の基幹産業である観光をさらに不動のものにするため、青函の縄文遺跡を世界遺産にする運動を強化したい」と話した。

水産練り製品の丸石沼田商店（青森市）の沼田広社長は「青函トンネル開通から30年近く経過し交流のマンネリ化は否めない。北海道新幹線開業で青森が通過点とならないうつ危機感をもって取り組みたい」と述べ、新幹線開業を機に改めて青函交流の拡大に取り組む考えを示した。

2015年(平成27年)10月9日(金曜日)

北海



北海道新幹線開業を見据えたビジネス展開などを考えたシンポジウム

青函協力さらに可能 経営者ら報告

青森でシンポ
来年3月26日の北海道新幹線開業を見据え、道南と青森の連携や新たなビジネス戦略を考える「津軽海峡交流圏シンポジウム」が8日、青森市の「ねぶたの家ワ・ラッセ」で開かれた。青函地域の食材を使って製品を作る企業などが取り組みを報告し、「さまざまな分野で青函の協力はさらに可能」と訴えた。

青森銀行系のシンクタンク、青森地域社会研究所と明治大ビジネス・イノベーション研究所が共催し、約150人が来場。青森と渡島管内七飯町産のリンゴを使ったロールケーキを販売する老舗洋食店「五島軒」(函館)の若山直社長、食品加工の丸石沼田商店(青森市)の沼田広社長、菓子製造のはとや製菓(同)の安保照子社長らが、青函地域の食材を使った土産品開発などについて報告した。

青森県経営者協会会長など

も務める沼田社長は「青森市内でホテルが不足する夏のねぶた祭りの時に函館のホテルと連携したり、函館の冬のイルミネーションと八甲田山の樹水を組み合わせた冬の旅行商品をつくるなど、さまざまな青函協力ができる」と強調した。

はとや製菓の安保社長は「新青森開業時、八戸は通過駅になると言われたが、地域の努力で利用客は減らなかつた」と述べ、新たな特産品開発や観光資源の発掘など、地域が連携した観光客の呼び込みが必要と指摘した。(青森臨時支局)

津軽海峡圏シンポ 新幹線開業へ交流

来年3月26日の北海道新幹線開業に向け、青森と函館を結ぶ青函地域の企業の取り組みについて経営者が紹介し合い、交流につなげようと、「津軽海峡交流圏シンポジウム」が8日、青森市で開かれ、県内と北海道の食品会社など計4社の幹部が活動を報告した。

青森銀行の調査研究機関「青森地域社会研究所」など

の主催。青森市の「はとや製菓」は、函館市にゆかりの産品を使った「のっけ丼茶漬」を新たに商品化することや、函館市のレストラン「五島軒」は、店内に観光客向けの地図を置いて観光客の滞在時間を長くする工夫をしていることを報告した。

報告に先立ち、同研究所理事長の成田晋・青森銀行頭取が「青函はより短い時間で結ばれる。経済の交流もより強くしていこう」と呼びかけた。



青函それぞれの企業の取り組みが報告されたシンポジウム(8日、青森市の「ねぶたの家ワ・ラッセ」で)

〈青森〉 来年3月の北海道新幹線新青森―新函館北斗間開業を控え、新たな経営戦略を探る「津軽海峡交流圏シンポジウム」が8日、青森市文化観光交流施設「ねぶたの家 ワ・ラッセ」で開かれた。写真（福田徳行撮影）。基調報告をした同市と北海道南部の企業経営者4人がそれぞれの立場から新幹線効果を受受する経営資源の再構築に意欲を新たに示した。

シンポジウムは青森銀行のシンクタンク・青森地域社会研究所などが主催。商工関係者や企業経営者約150人が耳を傾けた。

基調報告で、水産物の練り製品を製造・販売する「丸石沼田商店」（同市）の沼田廣社長は、「青森市と函館市は協力者の関係を構築するべき。（新幹線開業は）新しい青函時代のスタートで、交流を大いに進めなければならない」と指摘。北海

北海道新幹線で新経営戦略を 青森

道八雲町のみそ・しょうゆ製造業「服部醸造」の服部由美子専務は、食を前面に押し出した地域振興策を提言した。

最後に、コメンテーターの弘前大 人文学部の高島克史准教授は「自分たちだけでなく地域、産業全体を幅広い視野、時間で見る目が必要だ」と指摘した。



経営者視点で将来展望

津軽海峡交流圏シンポジウム 連携重要性訴え 青森

来年3月26日予定の北海道新幹線開業を控え、本県と道南地域の経営者の交流や協力などについて理解を深めることを目的とした「津軽海峡交流圏シンポジウム」が8日、青森市のねぶたの家ワ・ラッセで開かれた。

「新幹線新時代の津軽海峡交流圏における経営者交流とビジネス」をテーマとしたシンポジウムは、道南と青森が今までの以上に、みんなで頑張るべきだ」と呼び掛けられた。

（松田基継）



本県と道南地域の経営者交流や協力などについて理解を深めたシンポジウム